月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.110



ジェニス王立学園解放作戦、開始！

英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

新たな怪人がザナドゥに現る！

も～っと集まれ！ ファルコム学園

『閃の軌跡Ⅳ』から
セドリックが参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』

『軌跡』シリーズ始まりの
物語を振り返る

英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

ついに第3の主人公チームが明らかに!!

英雄伝説 創の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



謎多き3人目の主人公チームの詳細がついに到着！

2020年夏に発売される『軌跡』シリーズ最新作『創の軌跡』。今作は3人の主人公を切り替えながら物語を進めていくことが発表されており、これまでは旧作である『零』&『碧』の主人公であるロイド・バニングス、『閃』のリィン・シュバルツァーがそれぞれ主人公を務めることが発表されていた。そして今回、ついに謎多き第3の主人公の詳細が到着した！

『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ　https://www.falcom.co.jp/hajimari/

タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：2020年夏予定　**ジャンル**：ストーリーRPG
対応機種：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人　**小売価格**：未定　**CEROレーティング**：審査予定

※画面は開発中のものです。

《C》

CV：??

「此度の一件――考えていたよりも遥かに楽しませてくれそうだ」



フルフェイスの仮面で素顔を隠した騎士で、華麗な剣捌きによる戦闘を得意とする。
かつて内戦の引き金を引いたテロ組織《帝国解放戦線》のリーダーと同じ名を名乗っているが装束や使用武器が異なっており、その正体は多くの謎に包まれている。
帝国占領期にクロスベルを治めていたルーファス・アルバレア元総督の指揮下にあった衛士隊の不穏な動きを単独で探っているようにも見えるが……。



スウィン・アーベル

CV：梶原岳人

「――オレたちは人を殺さない。それでいいなら、あんたに雇われてもいい」



かつて“殺し屋”として活動していた過去を持つ少年。長さの異なる特殊な二本の剣を得物としており、戦局に応じて的確に近接戦闘をこなす。
クールな性格である程度の常識を弁えているが、相棒として行動を共にするナーディアに振り回されてしまうことが多く彼女の言動にはいつも頭を悩ませている。
ある出来事がきっかけで“殺し屋”として所属していた組織から抜け出し、ナーディアと二人で追手から逃亡する日々を送っている。



ナーディア・レイン

CV：石見舞菜香

"殺し屋"としてスウィンと共に働いていた少女。大きなぬいぐるみの中に様々な暗器を隠し持ち、中～遠距離戦において高い戦闘能力を発揮する。常に気だるげでヤル気のない発言ばかりしているが、優れた分析能力を持ち、かわいらしい外見と演技力で相手を騙す術に長けている。
スウィンと共に組織を抜け、逃亡の日々を送る中ある人物からの依頼を受けたナーディアたちは奇妙なトランクを運搬することになるのだが……。





「やっぱり、すーちゃんとなーちゃんは最強のコンビかも～♪」

ラピス・ローゼンベルク

CV：和氣あず未

人間の少女のような外見を持つ、ローゼンベルク製の小柄な人形。
人格を持ち、独立して稼働することが可能だが何故か自分自身に関する記憶を一切失っている。
ローゼンベルク製の人形であることを誇りとし、常に優雅であることを心がけているが半面、抜けたような言動を見せることも多い。
記憶と自身の正体を知るため、ある事件の最中で出会った《C》やスウィンたちと行動を共にするようになる。

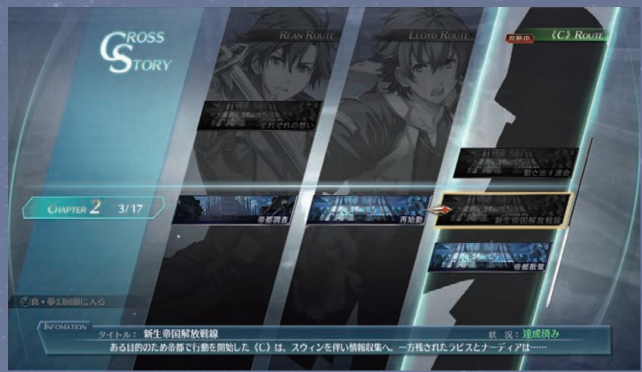


「そう――私は誇り高きローゼンベルク人形。あなたたち、なかなか見る目があるのね」



3人の主人公を自由に切り替えながら物語を進める『クロスストーリー』システム

『英雄伝説 創の軌跡』は、リィン、ロイド、《C》という三人の主人公を任意に切り替えながら物語を進めていく、『軌跡』シリーズ初の『クロスストーリー』システムが採用されている。各主人公それぞれのルートは大きくチャプター毎に区切られており、同じチャプター内であれば、自由に各ルートに切り替えられる。そして、チャプター内の各ルートを終盤まで進めることで物語が大きく展開し、次のチャプターへと進めることができるのだ。



●リィンルート



●ロイドルート



●Cルート



各ルートでイベントシーンが変化！

今回の『クロスストーリー』システムは、同じロケーションであっても、選択したルートによって訪れる時期・時間帯がズレたり、異なる情報が入手できたりすることがあるところがポイント。各ルートの登場人物がニアミスするようなシーンでは、ルートによってイベントシーンの演出も変化していくのだ。

●リィンルート



●ロイドルート



●Cルート





各ルートには、頼りになる仲間やゲストキャラクターが続々登場！

ロイド編に登場するリーシャ・マオをはじめ、各ルートには主人公たちの手助けとなる頼もしい仲間が続々と登場する。ストーリーに深く関わるゲストキャラクターたちも登場するほか、各ルートで仲間となった全キャラクターを自由に編成できる特殊なシステムもあるとのこと。シリーズ最多のキャラクターたちが集結したら編成画面でうれしい悲鳴をあげてしまいそうだ。

●ロイドルート



●リィンルート



●C ルート

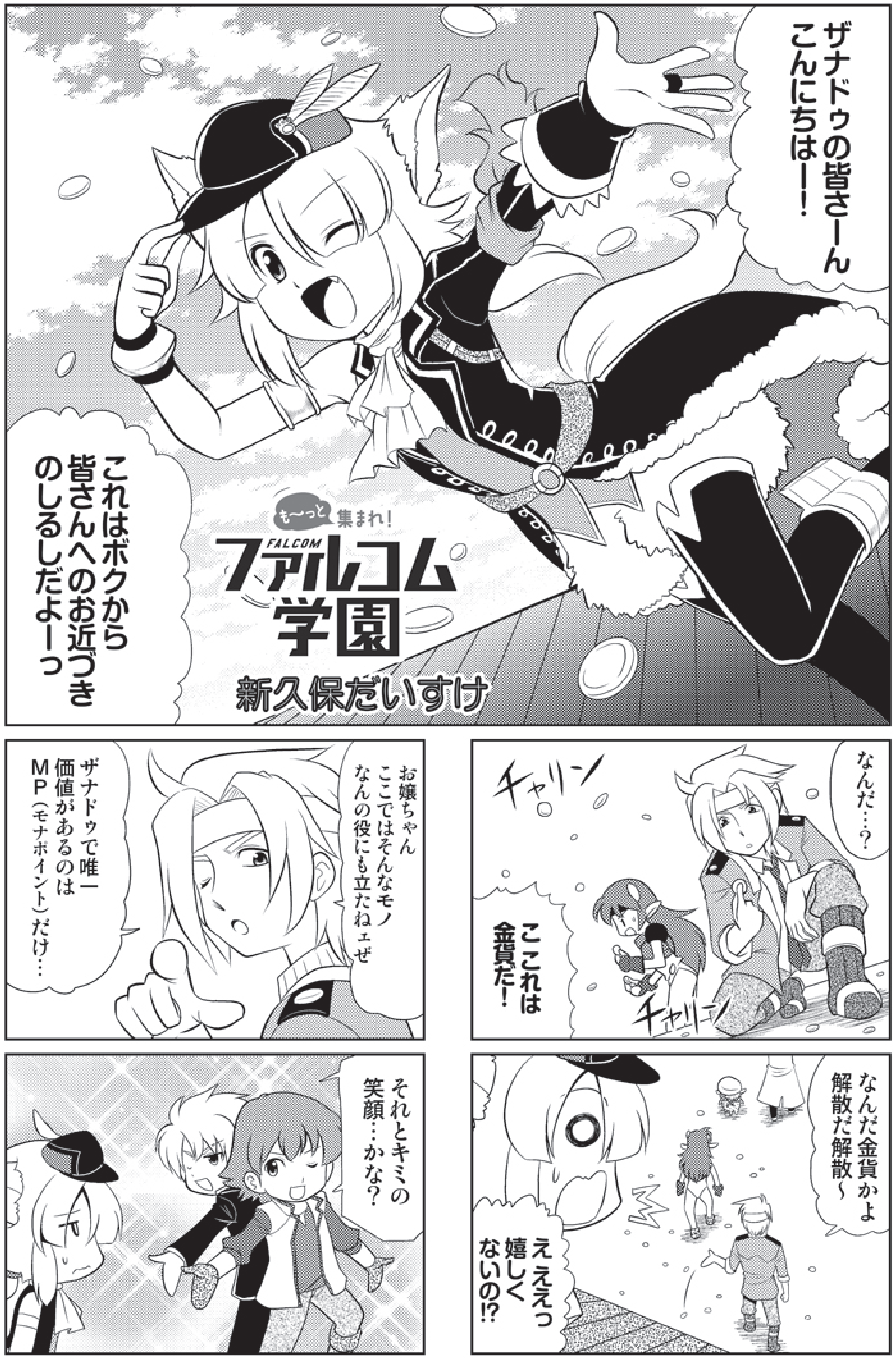


KEYWORD

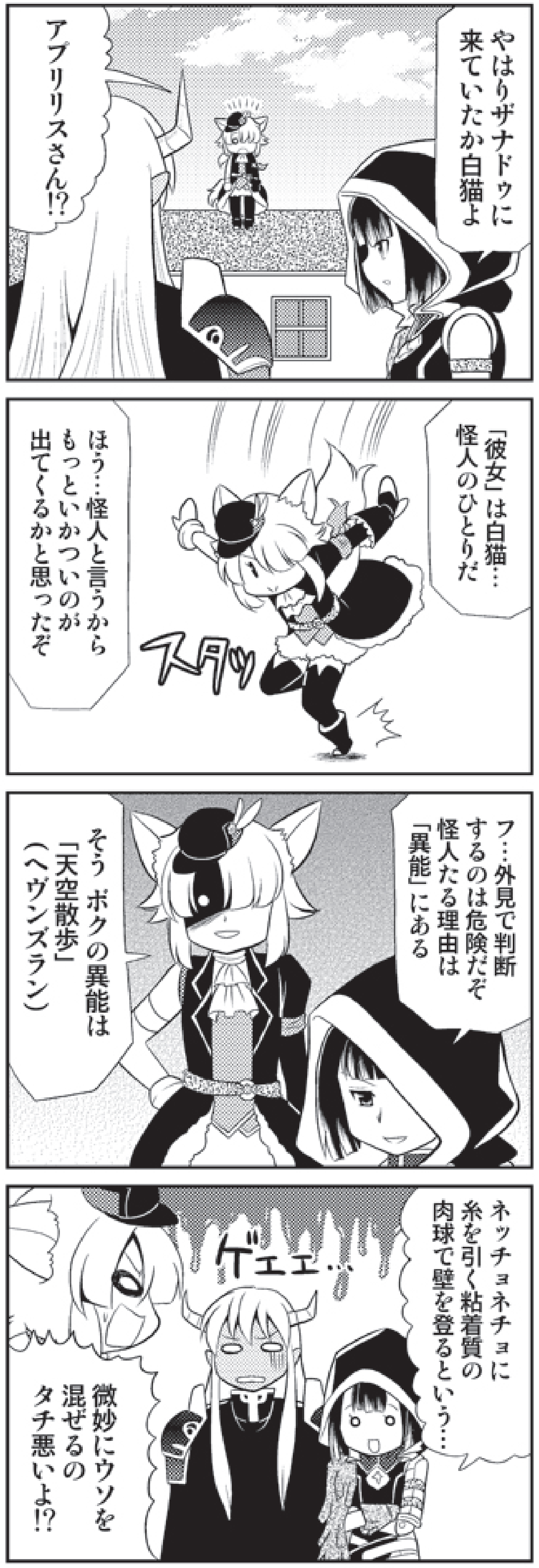
『3と9』

各国でベストセラーとなった冒険小説。
殺し屋の少年《ソードの３（スリー）》とパートナーの
少女《ソードの９（ナイン）》が組織を裏切り脱走を図るという筋書きとなっている。
二人の暗殺者の生き様を描いた本作は
老若男女を問わず様々な年代層のファンを獲得しているが、
「執筆者が不明」という謎めいた点もこの小説の魅力に拍車をかけている。
熱心な読者の間では、「主人公たちのモデルとなった人物を捕らえるため、
"手配書"代わりにこの小説が各国で出版された」という
まことしやかな噂話が囁かれることも。

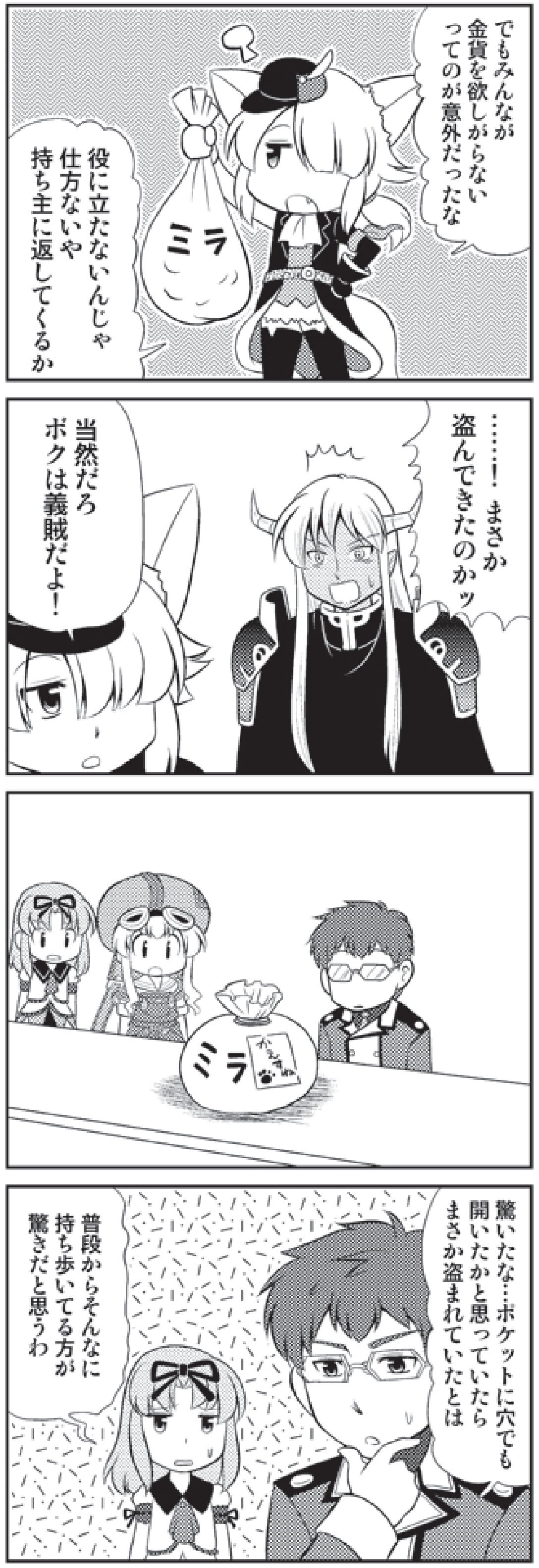
★ザナドゥに"怪人"推参!★



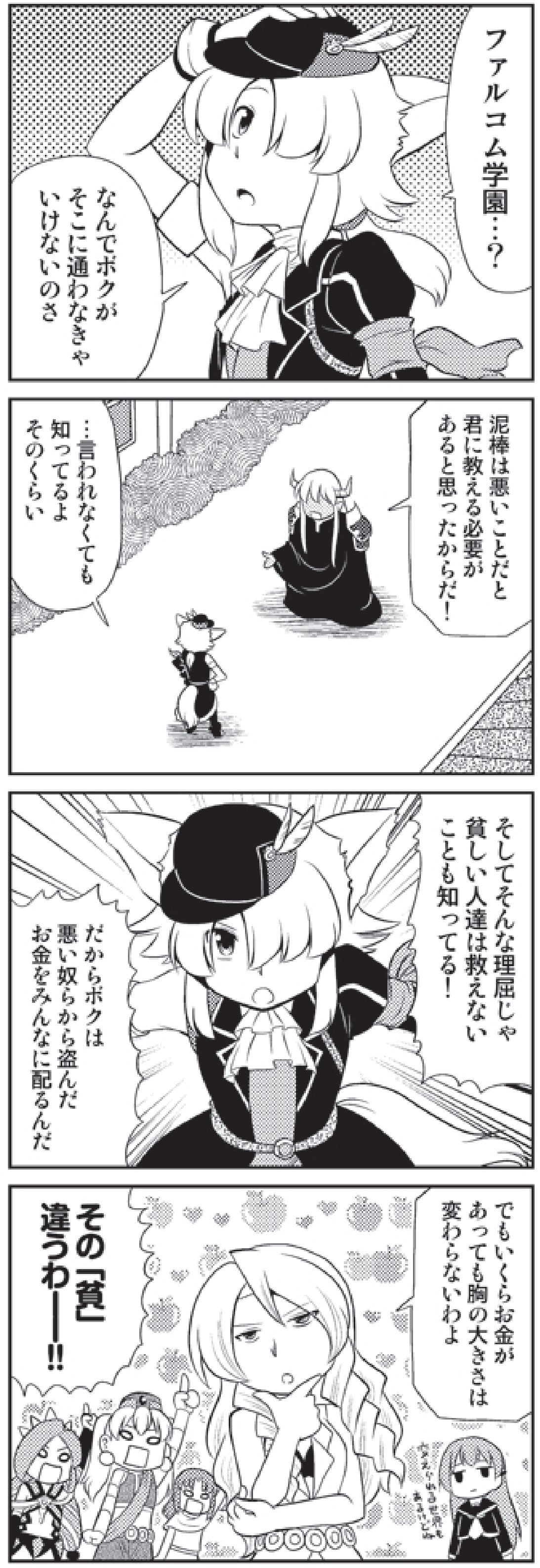
白猫の異能



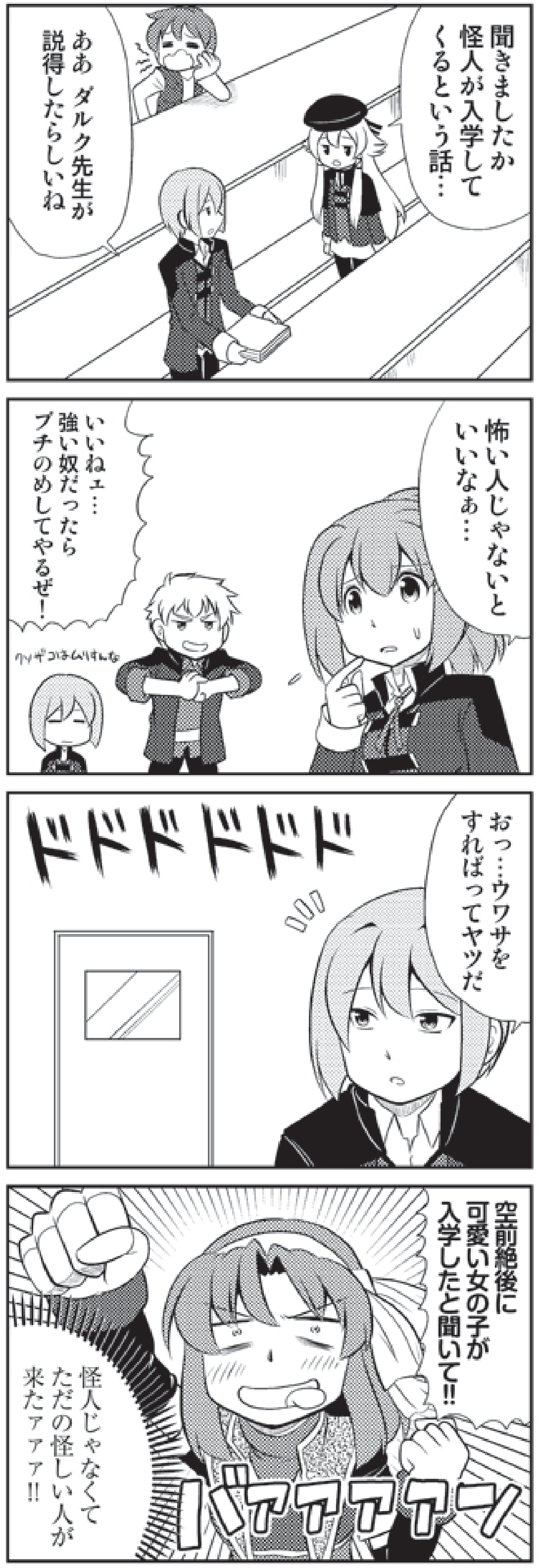
金貨の出処



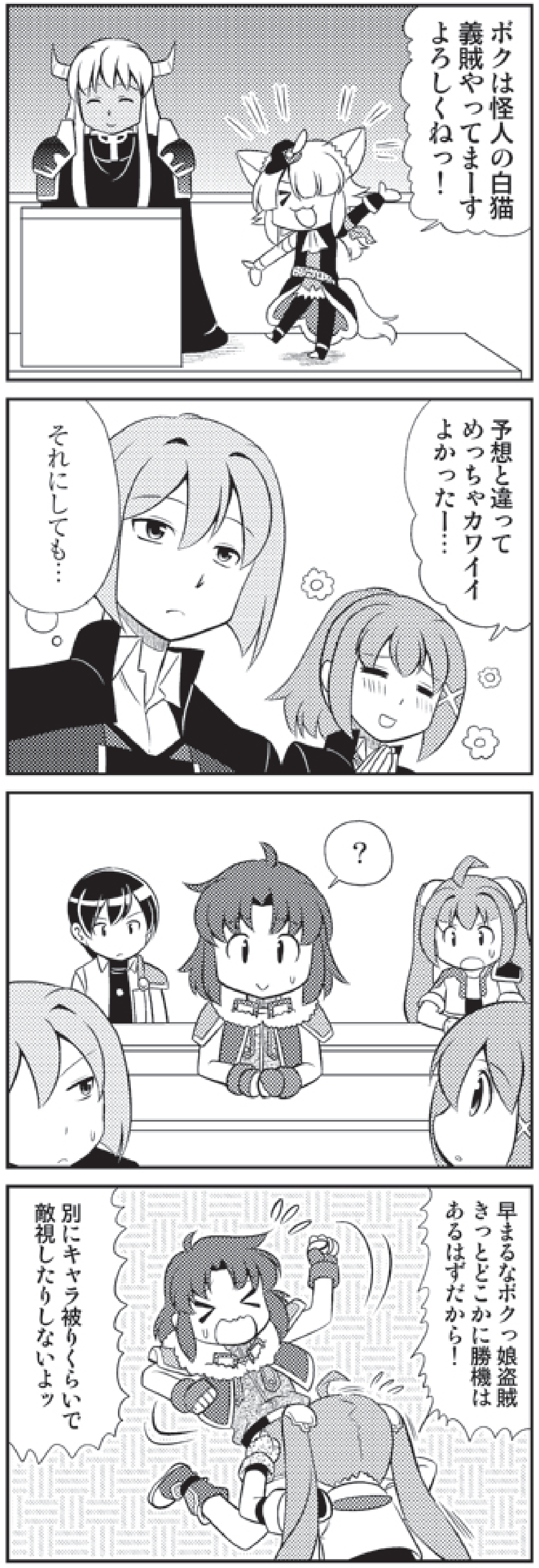
貧しい人のために



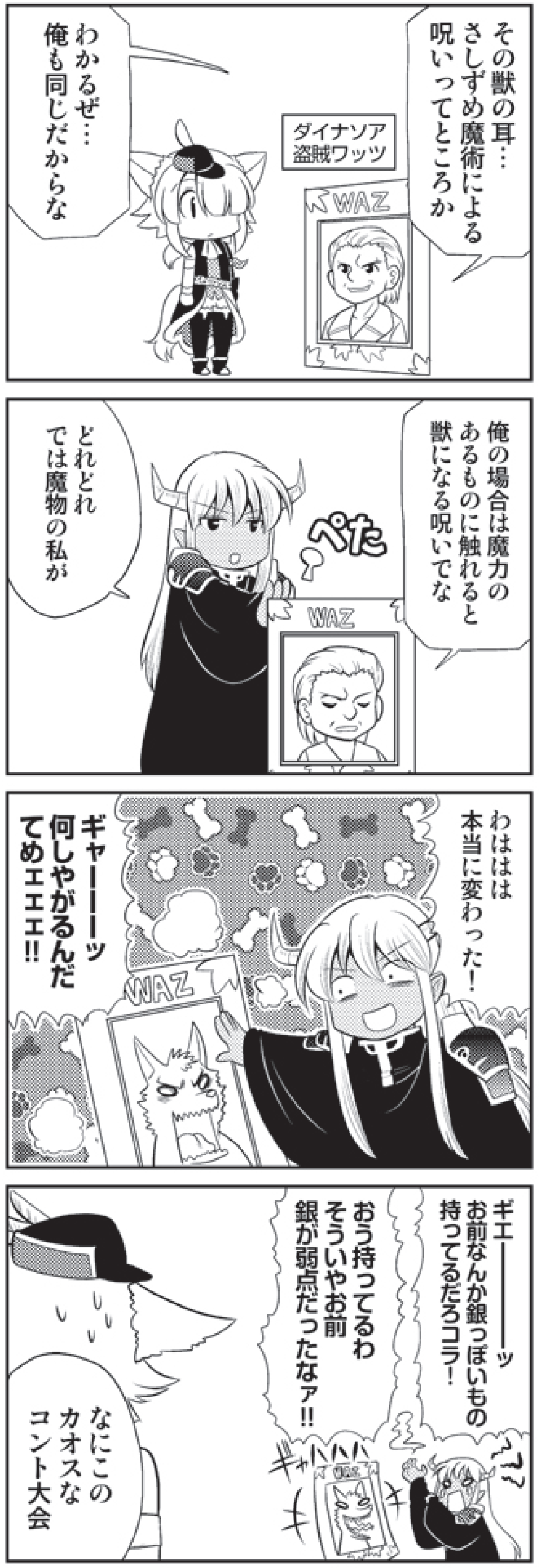
怪人襲来



ボクっ娘とボクっ娘



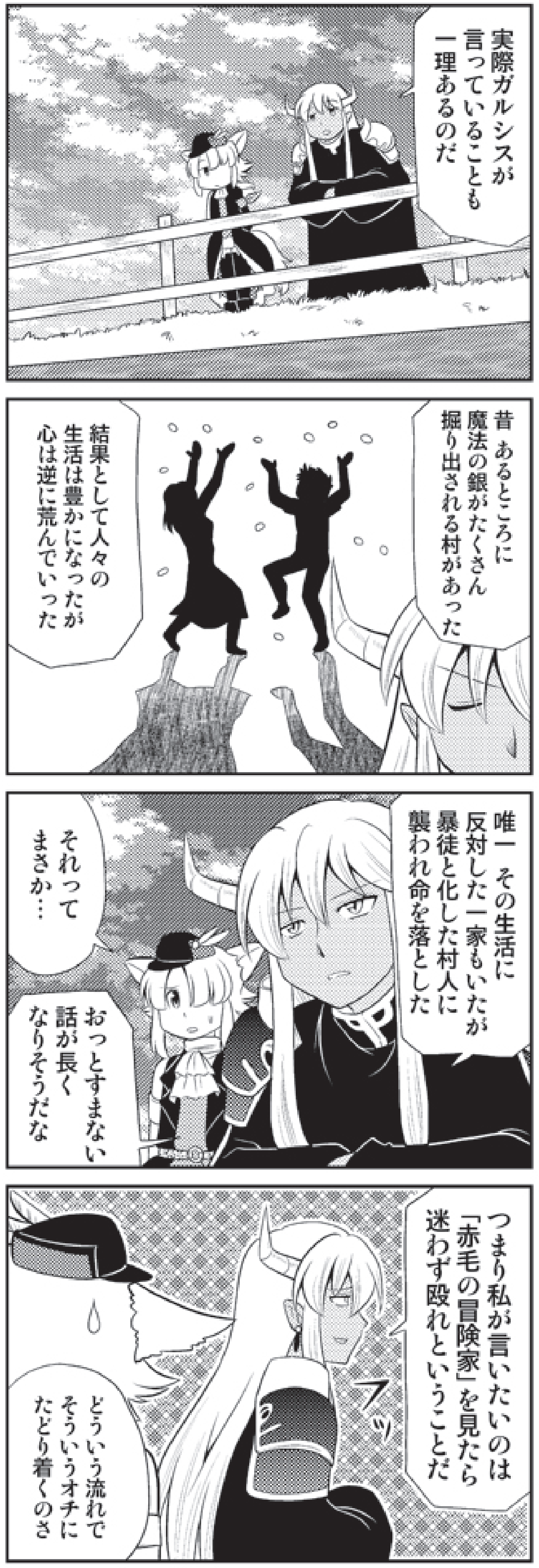
ワッツと魔物と銀のアレ



魔王様の金言



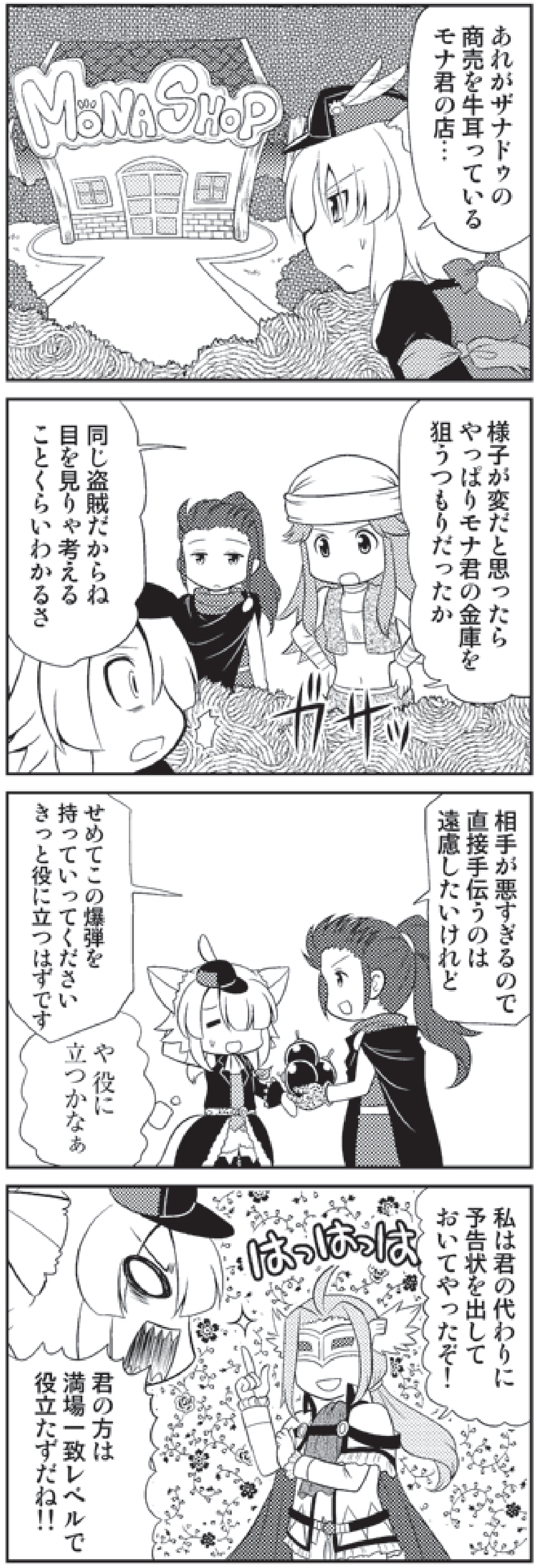
三段跳び論法



ネコとウサギ



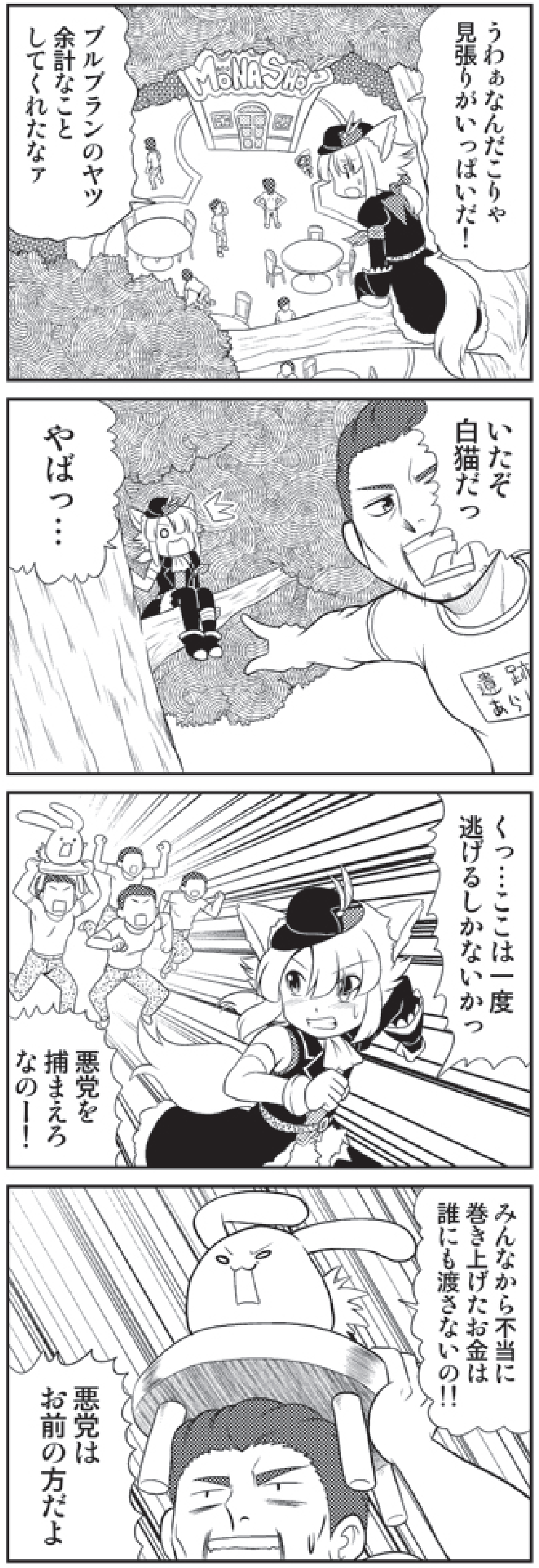
盗賊たち



養育費



真の悪党



ヤベェ技



商売の才能

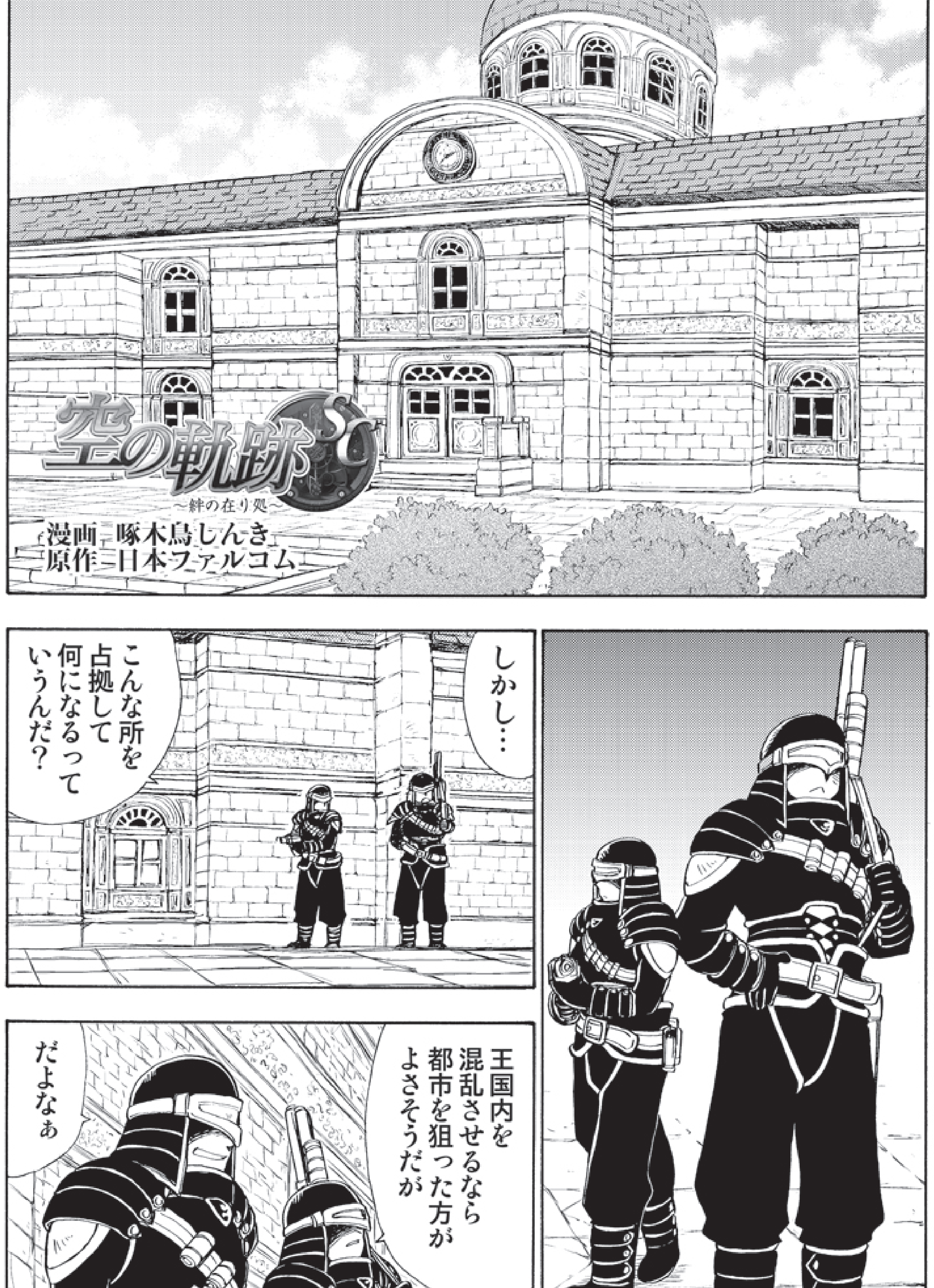




英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円＋税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks

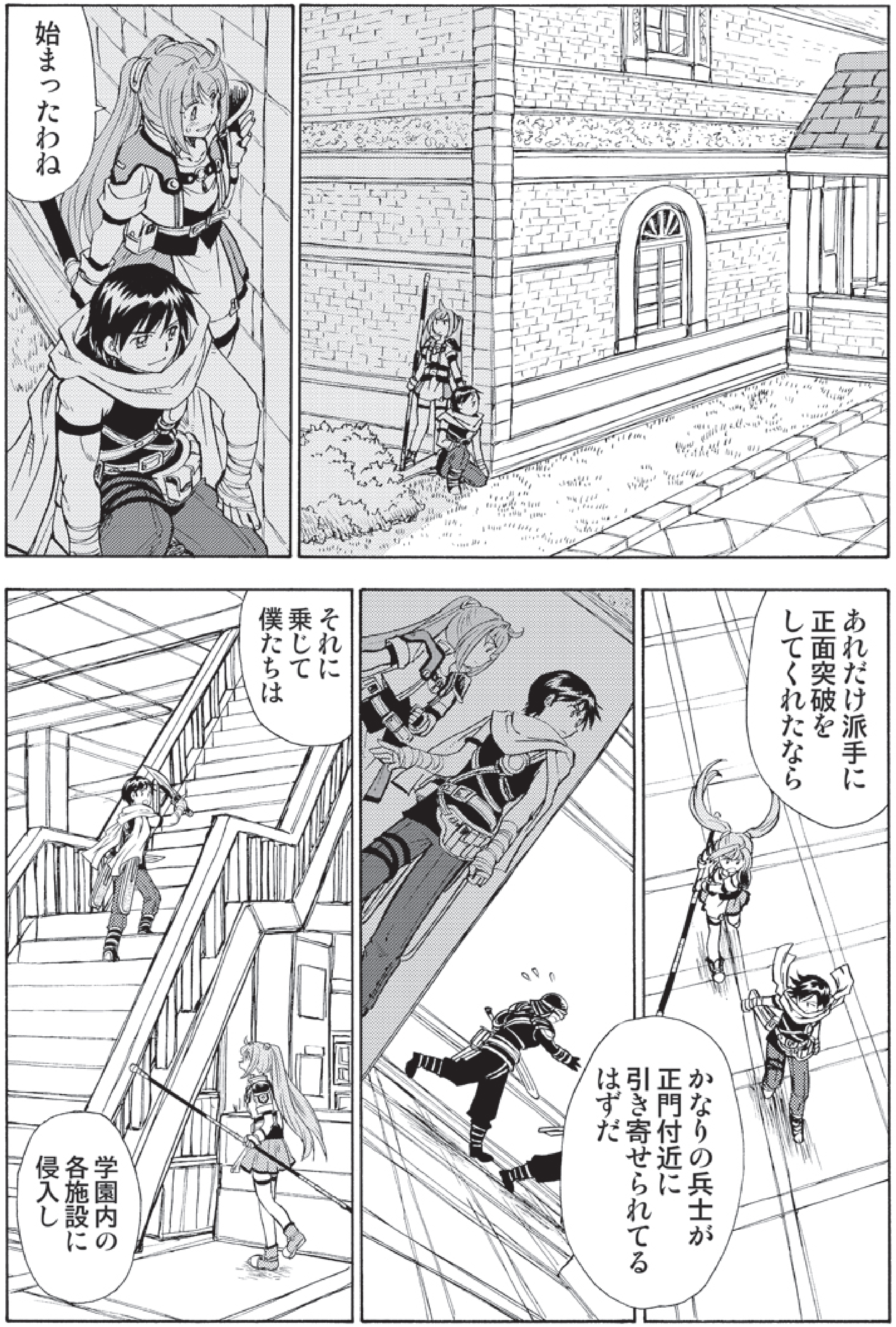


異世界《ザナドゥ》に
勇者よ再び！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園
① 著者：新久保だいすけ
定価：本体900円＋税
学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！　果たしてその理由とは!?
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！
ISBN:978-4-8021-3138-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©DAISUKE ARAKUBO
©2019 FIELD-Y
FB ファルコムBOOKS
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら ➔ www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら ➔ www.field-y.co.jp/falcombooks


空の軌跡SC
〜絆の在り処〜
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
しかし…
こんな所を占拠して何になるっていうんだ？
王国内を混乱させるなら都市を狙った方がよさそうだが
だよなぁ


ただ
この学園には各界の良家子女が集まってるらしいし…
奴が言うにはそこにどえらい人物が隠れてる可能性があるんだってよ
へー
まあ
こんな状況だから王国軍や協会に気づかれることはないだろうし
俺たちはのんびり構えていればいいんじゃないか
ズドドドドオン
な
なんだ!?
学園の正門か!?


じゃきーん！
どうだい!?
ラインフォルト社の火薬式アサルトライフルの威力は！
導力器が使えなくてもあんたたちには負けないよっ！
ふは～
か…火薬式の銃器!?
な…何者だ！おまえたちは!?
我々は遊撃士協会だ！
ジェニス王立学園は解放させてもらうぞ!!


始まったわね
あれだけ派手に正面突破をしてくれたなら
かなりの兵士が正門付近に引き寄せられてるはずだ
それに乗じて僕たちは
学園内の各施設に侵入し

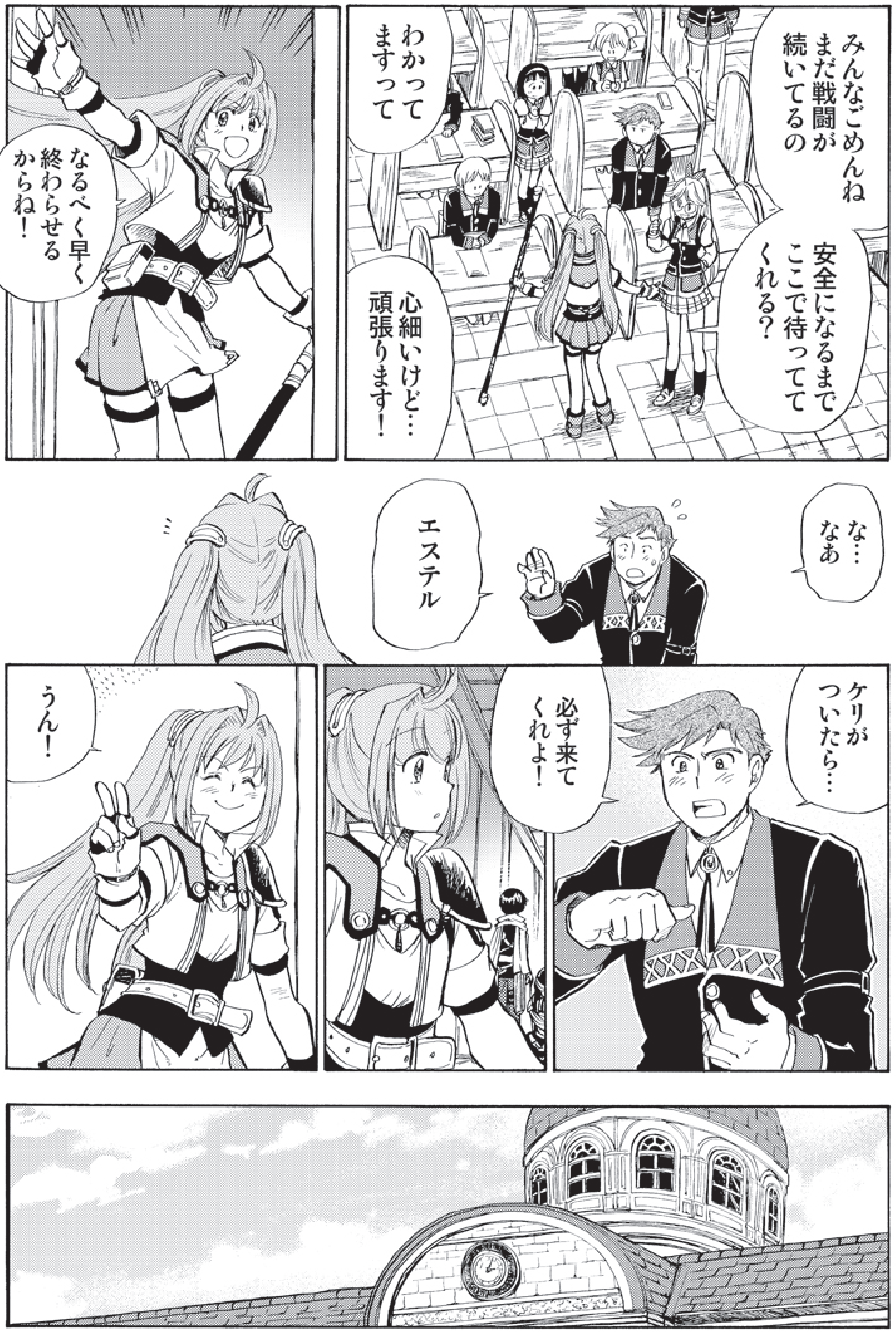

校舎内にいる
兵士の撃破と
拘束された
職員と生徒全員を
救出する
みんな
大丈夫!?

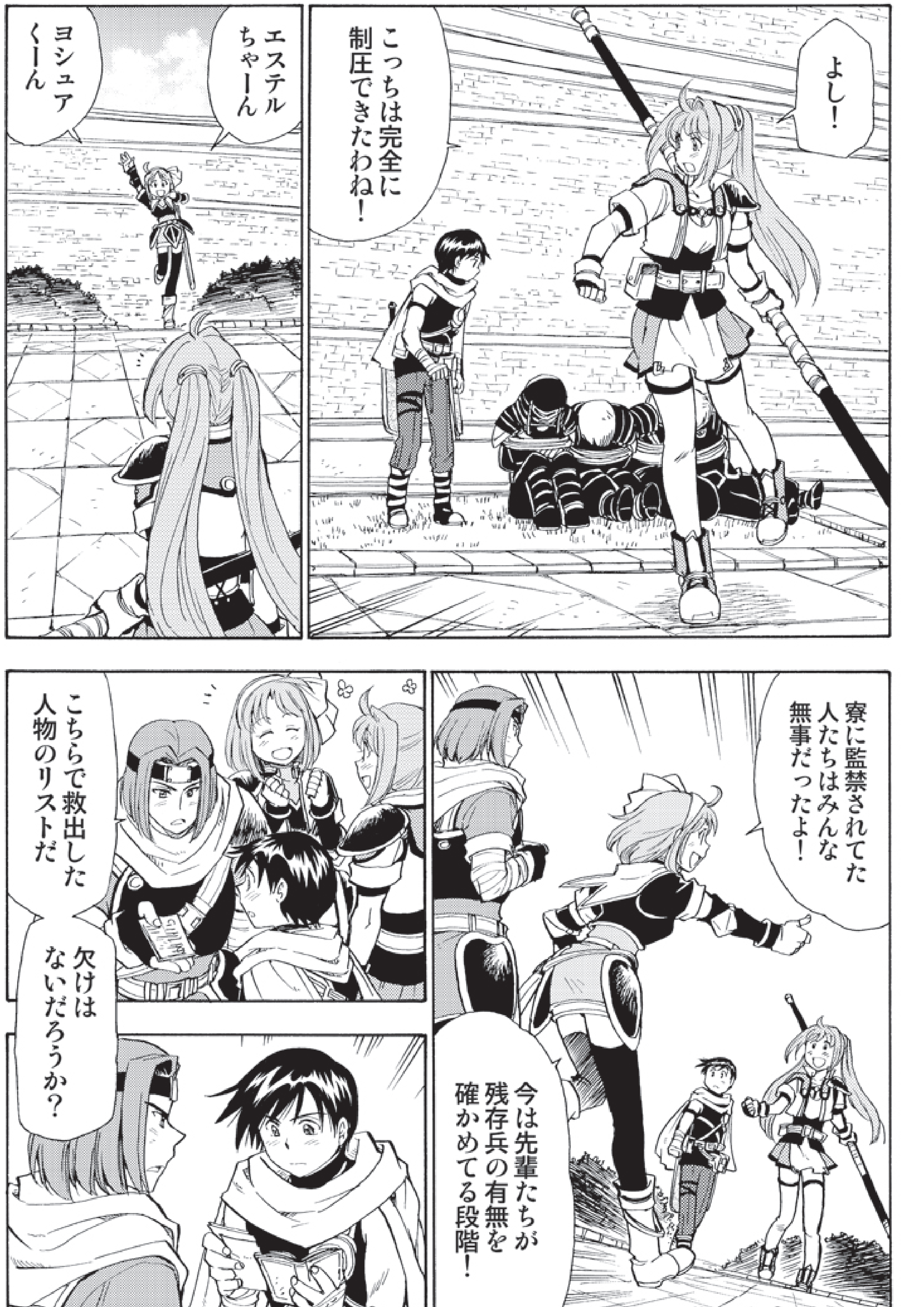

おお
エステル君!
コリンズ
学園長!
よかった…!
王立学園が
結社に占拠されたと
連絡を受けて
遊撃士協会が
助けに来ました!
学園の皆は
無事かね?
偵察時に
全員の生存を
確認しています
彼らの救出を
第一目標に
すえて
現在
学園内外にいる
兵士の制圧を
行っている
ところです
そうか…
…実はな
兵士の首謀者は
この学園の
出身者なのだよ
え!?
彼にとっても
この学園は
勝手知ったる
場所だ
くれぐれも
気をつける
ようにな

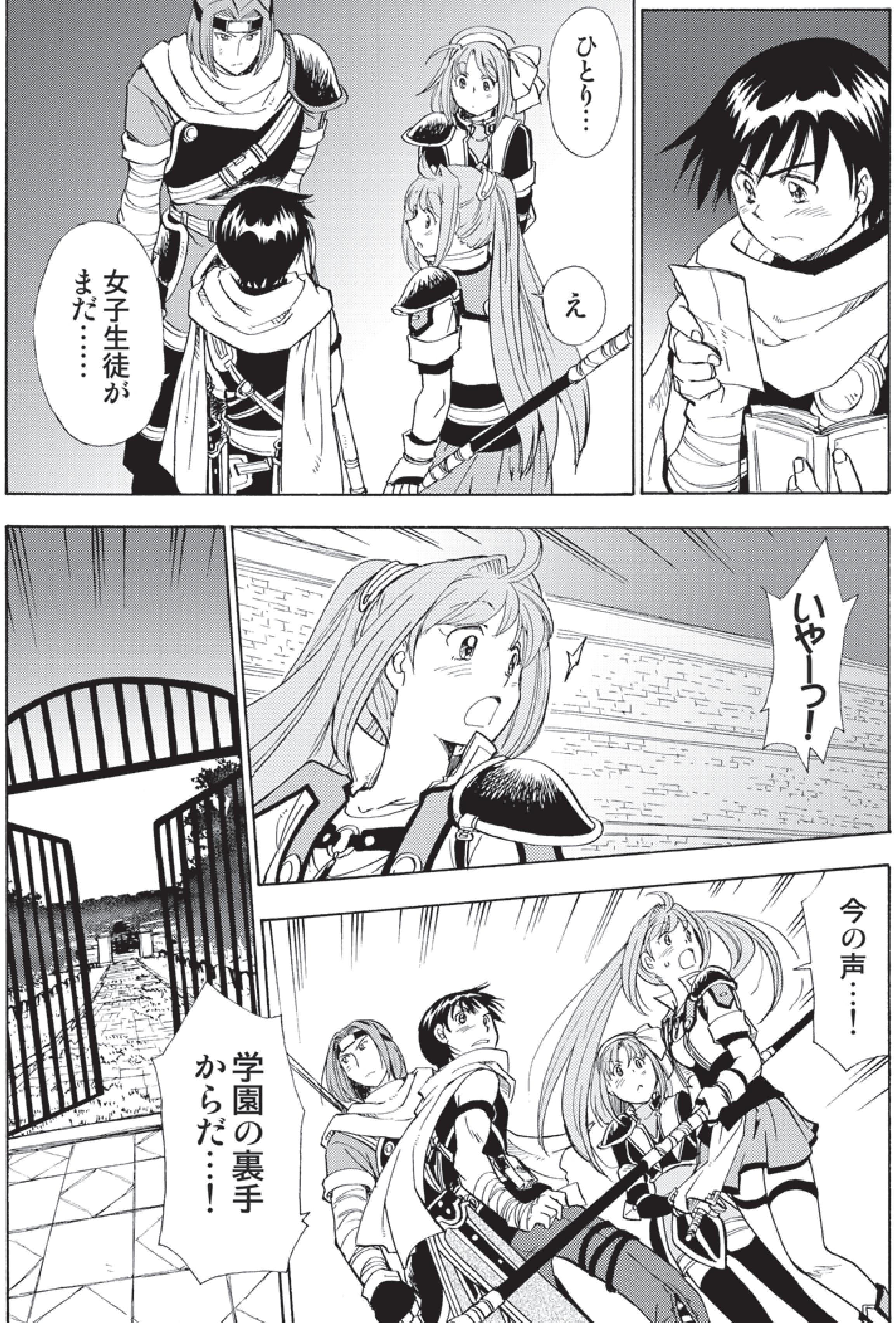

エステル
そこの人文科教室にも生徒が多数捕われているんだ！
行って確認を！
わかったわ！

みんな！
大丈夫!?
エステル！
待ちくたびれちゃったぜー
ごめんね！怖い思いさせちゃって
実は悪い奴らが学園を占拠して…
うんうん
…けどあんたがここに来てくれたってことは…
遊撃士協会による学園解放作戦が始まったからもう安心ってわけね！
これに書いてた
あ
そうだエステル


実はね
さっき教室に兵士が来てさ…
ここに王家の姫がいないか聞いてきたのよ
姫って…
あいつらの狙いはクローゼなの!?
そこまでは掴んでなさそうだったから
適当にあしらっておいたけどね…
あの娘が本当にここにいないのが幸いだったけど
犯人がそういう目的でも動いてるってこと
注意しておいてね
な…なあ…
ところでさ…
エステル!
あ
うん!


みんなごめんね まだ戦闘が続いてるの
安全になるまでここで待っててくれる?
わかってますって
心細いけど…頑張ります!
なるべく早く終わらせるからね!
な…なあ
エステル
ケリがついたら…
必ず来てくれよ!
うん!


よし！
こっちは完全に制圧できたわね！
エステルちゃーん
ヨシュアくーん
寮に監禁されてた人たちはみんな無事だったよ！
今は先輩たちが残存兵の有無を確かめてる段階！
こちらで救出した人物のリストだ
欠けはないだろうか？


ひとり…
え
女子生徒がまだ……
いやーっ！
今の声…！
学園の裏手からだ…！

次回に続く


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
もうひとつの
『空の軌跡』が始まる――
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！　©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら www.field-y.co.jp


英雄伝説 空の軌跡SC 4
ソラノキセキSC
～絆の在り処～
結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う、誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第４巻！
やっとあたしは、
ヨシュアに届くことができた。
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI　©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

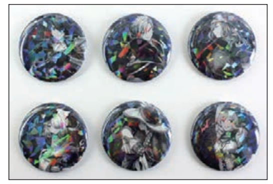
『イースIX』の魅力的なグッズが勢揃い！

オフィシャル倶楽部MAGより新発売された『イースIX』のキャラクターグッズを要チェック!!

■ホログラム缶バッジ３個セット（全２種）

『イースIX』の人気キャラクターがホログラム缶バッジ（３個セット）になりました。キラキラ輝く存在感抜群のホログラム仕様。〈Aセット〉〈Bセット〉をご用意！

価格:1,320円（税込）
本体素材:ブリキ・PET（ホログラム）・紙
安全ピン:スチール
サイズ（mm）:直径約56



■マグカップ （全８種）

イースIX人気キャラクターのマグカップです。お部屋に飾ったり、ティータイムにおススメです。

価格:1,650円（税込）
本体素材:陶器
※素材が焼き物の為、表面にピンホールや極小の黒い粒状の点がある場合などございますが使用上問題はございませんので予めご了承ください。
サイズ（mm）:約110（W）×92（H）×80φ



■モーテルタグ （全７種）

イースIXの人気キャラクターがアメリカの古き良きモーテルのルームキーをアレンジしたキーホルダーになりました！

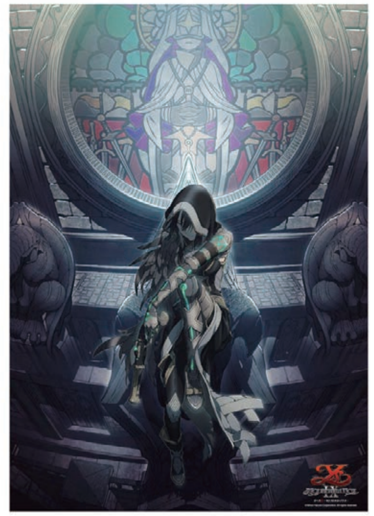
価格:990円（税込）
本体素材:アクリル（付属品を除く）
サイズ（mm）:アクリル 約縦90×横42×厚さ4
二重リング内径:約25



■クリアポスター（A3） イースIX《大聖堂》

画鋲やテープ等を使わず、ポスターを痛めることなく誰でも簡単にピタッと貼ることができるクリアポスター。窓ガラスに貼ったり、耐水素材なのでお風呂ポスターにも！

価格:1,320円（税込）
本体素材:自己粘着性フィルム
ボードサイズ（mm）:約297×420



■商品ページ https://store.shopping.yahoo.co.jp/ofc-mag/ys9.html

歴代マスコットキャラがゆるきゃら仕様に！

LINEスタンプ vol.29『ふぁるこむマスコットオールスターズ』配信開始!!

日本ファルコムのLINEクリエイターズスタンプ第29弾では、ファルコム歴代作品に登場したマスコットキャラや、思い出深いキャラクターたちがゆるきゃら仕様のスタンプに！
「イース」シリーズおなじみのピッカードをはじめ、「東京ザナドゥ」のモリマル、「イースVIII」のリトル・パロ&ハシビロコウ、更に「ぽっぷるメイル」のガウなど、懐かしキャラまでスタンプとしてお使いいただけます。



■『ファルコムLINEスタンプ』シリーズ紹介ページURL
https://www.falcom.co.jp/mobile/linestamp.html

「英雄伝説 暁の軌跡」キャラクターの新商品が登場！

ナハト、クロエなど試験班メンバーを中心としたアクリルフィギュア、缶バッジのほか、キュートなSDイラストを使用したぷちスタンド等ブラインド用商品も登場。ぜひ、この機会をお見逃しなく！

3月28日（土）より、GraffArt Shop なんば店、名古屋店内 Falcom Base にて、3月30日（月）より GraffArt Shop 池袋本店内 Falcom Base にて取扱い開始！

※同日10時～通販でも予約受付を開始します。
■ GraffArt Shop 通販サイト
https://kyaragoods.shop-pro.jp/







『英雄伝説 閃の軌跡II』のクロスピンとスマホリングが登場！

■クロスピン３個セット（全２種）

書類をまとめたりカードを挟んだり、さまざまなアレンジで楽しめる、ポップでかわいいクロスピンの３個セット。〈Aセット〉〈Bセット〉の２種から選べます。



〈Aセット〉



〈Bセット〉

●価格:1,980円（税込）
●本体材質:バッチウッド（木製クロスピン本体）、MDF木材（キャラクター本体）
●サイズ（mm）
木製クロスピン本体:約長さ8×幅10×奥行き20
キャラクター本体:約縦60×横50以内（キャラクターにより異なります）



※「リィン」「アリサ」「ラウラ」「マキアス」「ユーシス」「エマ」「フィー」「ミリアム」「アルティナ」「クロウ」

■スマホリング 英雄伝説 閃の軌跡II（全10種）

かわいいSDキャラを使用した「スマホリング」が登場！シールは水洗いで繰り返し使え、リングは360度回転するのでスマホを持ちやすい位置に調整できます。さらに、リングを立てれば視聴用に便利なスタンドに！

●価格:1,485円（税込）
●本体材質:アクリル（リング:亜鉛合金）
●サイズ（mm）:（本体）約縦67×横45×2（リング）内径約22×3

発売元:オフィシャル倶楽部MAG
発売日:2020年3月27日（金）

■商品ページ
https://store.shopping.yahoo.co.jp/ofc-mag/senkiseki2.html



3月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡
アカツキノキセキ

セドリック・ライゼ・アルノール

エレボニア帝国皇帝・ユーゲントⅢ世の嫡子にして第一皇位継承権を持つ皇太子。内戦時に《緋の騎神》の核として利用された事件を境に心身のバランスを崩してしまうも、Ⅰ年半の時を経て、性格から剣技に至るまで、別人のように成長を遂げる。その後、トールズ士官学院本校に入学。ギリアス・オズボーン宰相に多大な影響を受けており、帝国での災厄実現に向け、自身の立場も利用しながら惜しむことなく協力するようになる。

毎月魅力的な新キャラクターや
衣装替えキャラクターが大注目の
『英雄伝説 暁の軌跡』。
今月は「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ」から
セドリックが参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

4月の新規
衣装替え
キャラクターは？

制服・リーシャ

春らしい爽やかな制服を身にまとったリーシャ。スタンダードな制服デザインは軌跡シリーズでも珍しく新鮮な印象だ。劇団アルカンシェルの敬愛する先輩のイリアと、後輩・シュリのぬいぐるみが可愛い。カットインの方にはクロスベルの名物猫（？）・コッペの姿も

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

英雄伝説 空の軌跡1 ～消えた飛行客船～

第3回

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報

好評発売中

著　　　：はせがわみやび
イラスト：ワダアルコ
定　　価：1,200円（税別）

1章　消えた飛行客船

開いた窓の向こうで星がまたたいている。
明りも点けずにエステルは、ベッドの上で膝を抱えて空を見ていた。
連絡なんてなくたって、いつだってどこだって無事でいると信じていた。だって、父さんだもの。
エステルは自分の考えに気付いてびっくりした。
（なんだ。いちばん父さんを買い被っているのって自分じゃないのよ）
でも、と思う。
父がどれほど優秀な遊撃士か知らないが、万能でも無敵でもないはずだ。
（もし——飛行船が墜落していたら……）
頭を振って、嫌な考えを打ち払う。けれど、胸の奥にしこりとなって重たい何かがうずくまっているのを感じていた。
（だめだだめだだめだ！　こんなこと考えちゃいけない！）

枕に拳を撃ちこむ。なんでこんな弱気になっているのかと思う。悔しい。そう、エステルは悔しかった。こんなところで何もできずに膝を抱えている自分が。
ノックの音がした。
ヨシュアだ。
食事の用意ができたと知らせにきたのだけれど、もちろんそれだけではない。自分のことを心配して様子を窺いにきてくれたのだ。わかってる。シェラザードも自宅に帰らずに下の居間にいるのだろう。
みんなみんな父さんのことも心配してるくせに、エステルのことまで心配してくれている。
なのに——自分は。
ヨシュアにさえ生返事を返すなんて。
（何やってるんだ、あたしは！）
拳をもう一発だけ枕に撃ちこんだ。それからベッドの上で立ち上がる。
「父さん……」
あのオヤジときたら、いつの間にかボースの街に行ってて。
そこから飛行船に乗ってどこかに行こうとして。
そのまま行方不明なんて……でも。
絶対に無事だ。今までだって、笑顔でいつも帰ってきたじゃないか。それにもし、何かが起

こって帰れないでいるのならば……。
黒い空にまたたく星をもう一度だけ見上げてから窓を閉めた。
待っているばかりじゃなくて……。
昼のアイナの言葉がエステルの脳裏に蘇る。
『遊撃士たるもの、リベール王国内のすべての支部から認められなくちゃいけないの』
それに続けてシェラザードが言ったのだ。
『ボース、ルーアン、ツァイス、そして王都グランセル。まだまだ先は長いわよ』
それはリベール王国内の地方の名前であり、同時に都市の名前でもある。正遊撃士になるために回らなければならない王国内の街の数々。
そう――。
『ねえ、こうなったら他の地方にも行くしかないよね！』
ほんの少し前に、他ならない自分が言った。
（ちょうどいいよね）
ロレントを出てどこに行こうとしていたのか、父はエステルに言わなかった。
そう、それを考えれば、悪いことばかりじゃない。少なくとも、カシウス・ブライトはボースで定期船に乗った。それは確かなのだ。
そこまではわかっている。

だったら――。
エステルは勢いよくベッドから飛び降りた。

† † †

「まったく君ってヤツは……。前向きっていうか、神経が図太いっていうか……」
エステルが父を探しに行くとヨシュアとシェラザードの前で宣言すると、ヨシュアが肩をすくめながら言った。顔は笑っている。
付き合うよとヨシュアは間をおかずにいって、シェラザードまでも行くと言った。
「あたしは先生の弟子なんだから。当然ついていきますとも。あなたたちだけに行かせたりしないわ」
こうしてエステルたち三人は、ボースの街へと三人で旅立つことになった。
徒歩で。
飛行船の運航が停止しているからしかたない。
遊撃士の脚ならば、歩けば半日だとシェラザードが言った。自身の仕事は支部の他のメンバーに託すという。
旅支度を整えてから日が昇るのを待って、支部に報告に向かった。

朝早くからやってきたエステルたちに受付のアイナが驚く。
話を聞くと、他ならぬカシウスさんの事だから、とエステルたちのボース行きを認めてくれた。
仕事の引き継ぎにシェラザードとアイナが話し合う間、エステルたちは時間が空いた。
「ね、シェラ姉。待つんだったら、時計台の前でもいいかな?」
エステルの考えを読み取ったのだろう。シェラザードが頷いた。ヨシュアのほうはピンとこなかったようだ。ヨシュアと出会ったのは五年前だから仕方ない。
「それじゃあ、時計台の前で待ち合わせという事にしますか」
「りょーかい。ヨシュア、行こ?」
「あ、うん。いいけど……」
支部の建物を出て、エステルとヨシュアは時計台へと向かった。
街の中央、通りが十字に交わったその場所に、ロレントの時計台はある。
「けっこう新しい時計台なんだね」
青空に向かって伸びる、五階建てほどの高さの時計台を見上げながら、ヨシュアが言った。
「いちど壊されているから」
エステルは時計台の基部に嵌め込まれた金属板を指さしながら言った。
そこにはこう書かれている。

《七耀暦１０７５》リベール王家、七耀教会、ロレント市の合同で建立される。
《七耀暦１１９２》百日戦役中、ロレント攻囲にて、帝国軍の砲撃により倒壊。
《七耀暦１１９７》市民の協力により再建される。

最初に建てられたのは百年以上前。
それから長くロレントの街のシンボルとして時を刻んでいた。
だが――。
十年前の戦争のとき、帝国軍の大砲によって壊されてしまった。
そして、エステルとヨシュアが知り合った頃に、ふたたび市民の手によって、ロレント再建の象徴として復元されたのである。
「ねえ、ヨシュア。シェラ姉が来るまで、ちょっと上に昇っていいかな?」
「上に? 構わないけど……」
自分の様子が少しいつもと違って見えたのだろうか。ヨシュアは心配そうな顔をして、同行を承知してくれる。
狭い階段を昇ってゆく。
元々、整備のため以外には滅多に利用されない階段だ。お世辞にも昇りやすいとは言い難い

造りをしていたが、エステルもヨシュアも遊撃士である。これくらいは鍛えているから辛くはない。
　階段を昇り切ると、時計盤と同じ高さの見晴らし台に出る。
　視界が開けて頬に風があたった。
　この街ではいちばん背の高い建物だから、眺めは抜群だ。遠くまで見渡せる。
「はあ～。朝の空気が気持ちいい……」
「朝というには、もうだいぶ遅いけどね」
　街を囲む壁を越えて、遥か先のほうまで視界が通っていた。目を凝らすと、南にあるエステルたちの家の屋根が小さく見えた。
「この場所、君はあんまり好きじゃないと思ってたけど」
　ヨシュアがぽつりと言った。
「……好きだよ。でも、ここはお母さんの亡くなった場所だから……」
「え……」
　ほらまたそんな顔をする。させたのはエステルだけど……。
　手すりにもたれかかって空を見上げた。青い空。あの日とちっとも変わらない。
「十年前のあの日。ここにいたんだ」
　それだけでヨシュアは見当がついたのだろう。まるで自分が傷ついたみたいな顔をした。

　十年前だから、エステルは六つだった。
　そんな子どもが、たったひとりで時計台のてっぺんになんて登らせてもらえるはずもなく、母が一緒にいた。
「街を取り囲んだ帝国軍と父さんたちのいた王国軍は、すぐ近くで戦っていて、時計台からはその様子を見ることができたんだ」
　母に無理を言って連れてもらってきていた。
　当時のエステルは戦争についてあまりにも知らなさすぎた。しばしば無謀だと言われるエステルだが、何も知らずに本当の意味で無邪気に動いていたのは、あの頃だと自分では思うのだ。
　降伏を迫る帝国軍はロレントの象徴である時計台に目をつけ砲撃を行った。
　導力砲の最初の一撃で、最上部の物見台が吹っ飛んだ。次の一撃が石の柱を折り、最後の砲弾は基底部を破壊すると、もう時計塔は元の形を残していなかった。
　エステルと母は砲撃が始まったときには逃げ出して必死で階段を駆け下りた。
だが――。
　逃げ切れなかったのだ。時計台は傾いて、辛うじて倒れずに済んだだけという有様で、なかほどから上は完全に瓦礫と化していた。
「助け出されたとき、あたしはほとんど無傷だったの。お母さんが助けてくれたんだ。腕のなかに抱きしめて、降り注ぐ瓦礫から護ってくれた。泣きじゃくるあたしの耳元で子守唄を歌っ

て落ち着かせてくれた。あたしは、お母さんの胸に抱きついて震えているだけだった」

「エステル……」

「子守唄が少しずつ小さくなっていって、あたしは震えながらそれを聞いていた。不安で何度も呼びかけて。でも、返事の代わりにあたしの背中を叩く手は、少しずつ弱くなっていったの。あたしは、何もできなかった」

　ただ、泣くことしか。

　あの日から、エステルはここには来なくなった。

「この場所に来ると、心のどこかでお母さんに頼っちゃいそうで。あたしは——あのときに思ったんだ。何もできなかったあたしは、もうやめにしようって。あたしはお母さんを助けたかった。助けられるばかりじゃなくて……」

「……だから遊撃士に？」

「それもあると思う」

　エステルは、母のように誰かを護れる強さが欲しかったのだ。

　戦争を止めるために遊撃士たちが活躍したと知ったのは、もう少し後の事だった。

「でも、今日くらいは頼ってもいいよね。父さんを護ってあげてって、お母さんにお願いしても……」

　言いながら声は小さくなってゆく。黙ってしまったエステルに、当たり前だよと、ヨシュア

が優しく言った。

「父さんは無事だよ。君のお母さんが護ってくれるんだから。それに、もし何かまずいことに巻き込まれているんだったら……」

「ヨシュア……」

「君が助けてあげればいい。今度こそ。僕も手伝うからさ」

「うん」

　ヨシュアの言葉に、エステルの心がふわっと少しだけ軽くなった。

「僕の胸で良かったらいくらでも貸してあげるから。だから……」

　肩を抱いて言ってくれるその言葉にエステルは——。

　思わず吹きだした。

「くすっ。ヨシュアってば」

「へ？」

「あはは。かっこつけすぎ〜。まるで恋人に言う台詞みたい。『僕の胸でお泣き』とか。お芝居の見すぎ！　迂闊にそんなこと言っちゃうと女の子に誤解されちゃうわよ？」

「いや泣けとは言ってないし」

　ちょっと憮然とした表情になる。

「ま、励ましてくれてるのはわかるけどね。うん、ヨシュアのその気持ちは、ばっちりわかっ

てるわよ！　ちゃんと伝わったもん！」
「……どうだか」
　やれやれという感じで首を振りながらヨシュアが言った。
「ありがとうって言ってるんだってば。なんだか元気、出てきた。よーしっ！」
　エステルは両の拳を握って、気合を入れた。
「じゃ、そろそろ下に降りよっか？　シェラ姉が待ってるかも」
「そうだね」
　ヨシュアが言って先に階段を降りてゆく。さりげなく、昇るときは後ろに、降りるときは前に立ってくれる。相変わらずヨシュアは気配り上手だ。
　昇ってきたときよりもエステルの心は少しだけ軽い。
　一度だけ階段のなかほどで振り返った。
　遥か彼方に四角く切り取られて見えているロレントの青空に誓う。
（お母さん、待っててね。絶対に……父さんを連れて帰るから！）
　下で待っていたシェラザードと合流。

† † †

　エステルたちはボースへと向けて旅立った。
　夕方になる頃には中間地点にあたるヴェルテ橋の関所に着く。
　そのまま夜通しで歩くことも考えたけれど、この先の東ボース街道に大型の魔獣が出たと聞いて、夜明けを待つことになった。
　もう少し経験を積めばエステルたちだけで手配された魔獣を倒すこともできるかもしれないが、まだまだエステルもヨシュアも見習いから抜け出たばかり。
　ここで無理をしても良いことはない。
　夜明けに関所を出て、昼前にはボース市が見えてきた。
　街道から見える都市の大きさに、エステルは目を瞠（みは）ってしまう。ボース市は、ロレントの田舎育ちのエステルには初めて見る都会になるのだ。
　通行許可証を門番に提示して街の門をくぐった。
　街道をそのまま引きいれた大通りの先に、巨大な建物が見えてくる。
「あれが《ボースマーケット》よ！」
　リベール王国最大と言われる商業施設の名を、シェラザードが高らかに告げた。
　ボース市は、リベール王国内最大の『商業都市』だ。リベール五大都市のなかでは、王都に次ぐ大きさを誇る。
　街並は石造りのものが多く、木造の家も多いロレントに比べて、遥かに都会を感じさせる造

りだった。
それにしても、とエステルは思う。目の前の白い建物はなんという大きさだろうか。
左右に広がる建物の幅が視界に収まりきらないし、高さは三階ほどもありそうだ。
「いったい、何屋さんなの？」
そう問いかけたら、くすりとシェラザードが笑った。
「あの建物はね。ひとつのお店じゃないの。あそこは百貨。つまり色々な店が集まった屋内市場（マーケット）なのね。食料品、衣類、雑貨、家具、書籍……。大抵の買い物はあそこで出来るわよ」
しかも、とシェラザードは付け足した。
「見た感じ、高さもけっこうあるけど、あれで一階しかないから」
その言葉を聞いてエステルは驚いた。
あれで、平屋だって？　と目を見開いてしまう。
とても信じられない。
「ま、後でゆっくり見に行くとして、とりあえずは協会の支部に顔を出しましょう。何か事件の新しい情報が手に入るかもしれないわ」
「そうですね」
ヨシュアも頷く。
遊撃士協会のボース支部は、マーケットの建物を正面にして右、つまり北側にあった。

カウンターの奥にいたルグランという好々爺（こうこうや）が、この支部の受付らしい。
シェラザードとは既に顔見知りのようだ。
互いに名乗り合い、挨拶を済ませると、ルグラン老人から行方を絶った飛行船の事件の続報を聞く。
それによると、軍による捜索は続いているが、いまだ進展はない、とのこと。
すこしだけ落胆してしまう。
ここに来ればなにか進展があると思っていたのだ。
だが、軍による厳しい情報統制もあって、協会にさえ詳しい情報が入ってこないらしい。
「なんでよ、軍と協会（ギルド）って協力関係にあるんじゃないの？」
「それはあくまで建前ね」
「縄張り争いですか……」
ヨシュアが眉をひそめながら言った。
「残念ながらそのとおりじゃ。しかも、この件にはモルガン将軍が乗り出してきているらしい」
「げっ！　あの、遊撃士嫌いと噂の将軍が？　それは面倒な話になってきたわね……」
シェラザードが顔をしかめた。
「調査地区には遊撃士を立ち入り禁止にしよった。通達が来てな。理由なく近寄ることまかりならん、と言ってきおったよ」

これにはエステルも驚いた。
調査禁止だって？
「なっ！　それじゃ、ここまで来て、あたしたち何もできないの？」
「まあ、そうなるな」
「そんなぁ……。くっ、こうなったら、その将軍と勝負して、どっちが調査をするかを白黒つけて決めるしかっ！」
「なに無茶苦茶言ってるかな」
呆れられたが、エステルは本気だった。
だって、ボースまでやってきて指をくわえて見てろというのか。
（冗談じゃないわよ！）
「待て待て。血の気の多いお嬢ちゃんじゃな。そう焦るでない。まだ手はある」
ルグラン老人に言われて、エステルはえっと振り返った。
「手があるって？」
「そうじゃ。実はじゃな。この事件に関しては、ボース市長からも依頼が来ておる。詳しい情報を手に入れたい、とな」
「なるほど……。そういうことね。たしかにボースの市長からの正式な依頼ともなれば、こちらが動く充分な大義名分になるわね」

シェラザードが頷く。
王都に次ぐ大都市の市長にはそれなりの権威があるということらしい。
「そっか。わかった、その依頼、あたしたちが受けるわ」
「うむ。いいじゃろう。シェラザードの実力は知っておるしな。充分じゃ」
「あ、うん」
エステルは信頼されたのは、あくまでシェラザードの実力のほうだと気付いた。だが、それも仕方ないだろう。まだエステルたちはボースでは何もなしていない。
「では、転属手続きを済ませて、調査に取り掛かることじゃな。市長の屋敷はこの街の西門の近くにある。行って、ともかく詳しい話を聞くがよい。こちらからも連絡は入れておこう」
「うん！」
エステルは元気よく返事をし、ヨシュアとともにボース市の支部に所属を移すサインをする。うじうじ悩むのはエステルの流儀ではないし。隣でシェラザードが待っている。彼女は正遊撃士だから、リベール王国内のどこでも自由に活動ができるのだ。
（まだまだ半人前ってことだよね……）
エステルは内心でそう思いながらも、いつかはシェラザードのようになるのだと新たな決意をするのだった。
サインを済ませて市長の屋敷へと向かう。通りを西に向かってしばらく歩くと、きれいな白

い石壁の市長邸が見えてきた。
呼び鈴を押して、身分を告げる。
中年の執事が現れて、市長は不在だと返してきた。
支部から少し前に連絡があったらしく、エステルたちの来訪は知っていたが、その前からメイドを連れて屋敷を出てしまったとのこと。
しかたなく、市長の訪れそうなところを教えてもらってから、エステルたちは屋敷を出た。メイドを連れた人物という手がかりを頼りに捜すことにする。待つだけというのは、エステルにはいちばん耐えられない。
あいまいな手がかりだったが、市長は無事に見つかった。
それも実に思いがけない場所で……。

† † †

そこは、屋内なのに市場だった。
ボースマーケットは三階ほどまで吹き抜けの大きな箱型の建物で、なかでは、大小のさまざまな物を売る店がたくさん軒を連ねていたのだ。
店と店の間の隙間がそのまま通路になっており、客たちは、店のなかを走る通路の左右をゆっくりと眺めながら自由に品定めをすることができた。
「はー、ずいぶん広いわね……」
エステルはぽかんと口を開けたまま、きょろきょろと首を振ってしまう。ロレントにはこんなに大きな店はない。しかも、品ぞろえも豊富だった。
食べ物から雑貨まで。
買い物に来たわけでもないのに目移りしそうだ。
「ここにいるんですか?」
ヨシュアが前を歩く人に尋ねた。
「はい。目立つ方ですから、すぐに見つかると思います」
答えたのは、エステルたちを案内してくれている女性――市長付きのメイドであるリラだ。街に出たエステルたちがまず見つけたのがこのメイドだった。メイドと共にいるはずの市長のほうは、メイドを放り出してこのマーケットに来ているらしい。
「ああ、やっぱり思ったとおり」
メイドのぽつりとこぼした言葉に、はじかれたようにエステルは顔を向ける。
ぱっと目に入ったのは、上目遣いで腰を折っている男二人と、仁王立ちになった女性の背中だった。
「し、しかしお嬢さん……」

男のひとりが、弱々しげな声で向かいの女性に訴えている。ぴくり、と女性の肩が跳ねた。
背中が怒っていた。
「貴方たち、恥を知りなさい」
静かにそう言った。
決して声を荒げているわけではない。静かな声で、諭すように優しく言ったのだ。
けれど、その声を聞いた男二人のほうは身をすくませて目を伏せた。
あれでは後ろ暗いところがありますと、全身で表現しているようなものだ。
「あなたたちが、定期船の運航停止を知ってから、食料を買い占めて値を釣り上げようとしたことは調べがついています」
びくり、と男たちがさらに身を縮こまらせる。
「商売は信用第一ですよ？　今、手近な儲けを優先して、街の人々から、『労せずして必需品で暴利を貪った』と揶揄される行為を、どこまで正当化できると思っているのです」
「ぐ……そ、それは……」
「それは、わがマーケット全体の悪評に繋がります。即刻、元の値段に戻しなさい」
なんとも厳しい言葉だった。
おそらくはマーケットの商人なのだろう。男二人は二の句も継げずに、ただ頭を低くするばかりだ。

だが、エステルが真に驚いたのはその後だった。
「わたくし、貴方たちのボースマーケットにかける情熱を疑っているわけではありませんわ。大丈夫。あなたたちならば、そのような小手先の儲けなどなくとも、立派なボース商人になれますとも！」
そう言って――たぶん微笑んだ。
エステルからは彼女の背中しか見えなかったが、間違いない。彼女の笑顔を見て、男二人は、ぱあっと顔を明るくしたのだ。女神に微笑みかけられた子どものように。
「お、お嬢さん……」
「はい、頑張ります！」
先ほどまでの卑屈で開き直ったようだった態度はどこへやら。商人らしき二人は、誇らしげに胸を張って、通路の脇の自らの店へと戻っていった。
やれやれというため息をついた女性に向かって、メイドが声をかける。
「ふう……」
「相変わらず見事なお手並みです」
声にくるりと振り返った。
栗色の髪をした、エステルよりも四か五つほど年上の女性だった。赤いリボンに赤い上着。
胸元には対照的に青い宝石。仕立てのよいお嬢様っぽい服を着ている。

背筋はぴんと伸びていて、まっすぐな瞳でこちらを見つめてきた。
同じ女性とはいえ、きれいな女のひとにこうもまっすぐに見つめられると、どきりとしてしまう。
（み、見られてる?）
「その紋章は……」
その言葉で、エステルは我に返った。
（このひと、まっさきにそこに注目して……!）
先ほどの自分の倍ほどの年齢の男二人を相手にして、きっぱり言い聞かせていたことといい、ただものではない。
メイドが声を掛けたということは、この人が……。
ヨシュアがつぶやく。
「ひょっとして貴女が……」
「ふふ。どうやら当たりみたいね。リラが傍にいるもの」
そう言って、女性は深々と腰を折る。
「わたくし、メイベルと申します。このマーケットのオーナーにして、ボースの市長を務めております」
花が咲くように微笑んだ。

予想はできたとはいえ驚いた。
まさか、この女性が――。
「ボースの市長……!」
しかも、巨大なマーケットのオーナー、つまり持ち主だという。
「はい。あなたたちが依頼していた遊撃士の方々ですわね? では、詳しいお話を。と言いたいところですが……、ここでは落ち着いて話せませんね。場所を変えましょうか」
そこまで一息で言って、口を挟ませなかった。
エステルたちは、そのままマーケットの建物を出るよう促され、さっさと先を歩く市長の後を追い、気づけば《アンテローゼ》という名の豪華なレストランまで連れていかれてしまった。
すっかりこの市長のペースに乗せられてしまっている。
「た、高そうなお店……」
豪奢なシャンデリアを見上げて、ため息をついてしまう。
そのレストランの椅子は座ったことがないほどふかふかで、腰を下ろしたとたんにお尻がぐっと沈み込んだ。それでいて身体をしっかり支えてくれるのだ。立派な庶民であるエステルは、そわそわドキドキ落ち着かない。
メイドのリラが引いた椅子に、馴れたふうにすっと市長が座った。貫禄が違う。
「エステルってば、もうちょっと落ち着いて」

「無理だよ。シェラ姉はこういうところも慣れてるのかもしれないけど。ロレントのホテルだって、ここほど立派じゃないもん！」
そう正直に言ったら、シェラザードもヨシュアも微妙に呆れた顔になった。
（うう。しまった。恥ずかしいよう）
これでは田舎者ですと看板を出しているようなものだ。
だが、エステルのじたばたを見ても、メイベル市長は笑わなかった。
「ここはよく商談に使いますの。味もなかなかですわよ？　ボースのお勧めホテルですわ。これからもよしなにお願いしますね」
言われた言葉を脳裏で反芻していてエステルは気づいた。メイベルがはったりだけでこのホテルを選んだわけではないこと。常にボースの宣伝を考えているわけだ。そして、エステルたちがボース出身でないことを知っている。
「えっ。あたしたちそんな田舎者ってわかります⁉」
思わず口から出てしまった。
それを聞いて、ヨシュアがやれやれと肩をすくめる。
「君が自分で言ったからだよ。ロレントのホテルはここほど立派じゃないってね」
ヨシュアの指摘にエステルは顔を赤らめた。しまった、そういうことか。
（どうしよう。今すぐ帰りたくなってきた——って、だめだめ！　ここには遊撃士として来ているのに！）
葛藤があったが、なんとか乗り越える。
こちらが落ち着いたのを見てとったのか、メイベル市長が口を開いた。
「それでは、改めて依頼内容を確認させていただいてもよろしいでしょうか？」
エステルたち三人は、いっせいに頷きを返した。
これで——。
行方知れずになっている飛行船と父の消息を追える。

第五幕　空賊たちを追って

街道を戻り、エステルたちは北へと続く分かれ道へとやってきた。
この北に続く道が《アイゼンロード》だ。
そして、その先にある巨大な鉄の門が《ハーケン門》。
門、と呼ばれてはいるが、もちろんぽつんと門だけがあるわけではない。
北の帝国と国境を接する地であるそこは、王国軍の駐留する軍事施設なのだった。
エステルたち——エステルとヨシュアとシェラザードは、アイゼンロードへと足を踏み入れようとして、道の両脇に立つ兵士たちに呼び止められた。
「止まれ！　この先は、現在通行禁止となっている！」
厳めしい顔の兵士に断固とした口調で言われて、仕方なくエステルたちは足を止めた。
予想していたので、驚かない。
（やっぱりか）
普段ならば誰もが通れるはずだった。北の帝国と行き来する旅行者はこの道を通るしかなく、帝国との行き来は許可されているのだから。

だが今は……。
エステルは自分たちを引きとめた二人組の兵士を観察する。
彼らはリベール王国軍の兵士だ。エステルの父も十年前の戦争時に似たような軍服を着ていた。階級が違うのだろうか、細部は違うようだったが、よく似ている。当時のエステルは六つかそこらなので、父の階級が何だったか、さっぱり覚えていないのだが。
（さて……ここからが問題よね）
軍から情報を引きだそうというのだ。そう簡単ではない。ただエステルたちには、ボース市長メイベルが用意してくれたとっておきの切り札があった。
「通らせてくれないの？」
「関係者以外の立ち入りは禁止でね」
右側の兵士よりもやや柔らかい物腰の左の兵士が言った。
この場合の関係者とは、軍人たちや、物資を届けにくる商人たちのことだろう。物見遊山な旅人や遊撃士はお断りということだ。
「でも……、あたしたち、関係者なんだけど」
「なんだと？」
「これ、見てくれる？」
そう言って、エステルはふところから『とっておき』を取り出した。

「なんだ……こいつは？」
　受け取った兵士がいぶかしみつつも検めた。それは一枚の書類だった。
「これは……！」
「おい。どうした？」
　物腰のやわらかなほうの兵士が驚いた顔になったので、右の兵士が近寄って覗きこむ。
「げ！　メイベル市長からの依頼状……だと!?　『飛行船事件の詳細な情報を求む。この者たちは私の代理であることを保証する。ボース市長メイベル』……モルガン将軍宛てじゃねえか！」
「へっへーん！　どう？　これでも通してくれない気？」
「む……ううむ」
　唸ったまま二人とも考えこむ。
　エステルはそれ以上は余計なことを言わずに黙っていた。自分たちが遊撃士であることは表に出さない。いつもは胸に付けている紋章も外してあった。
　エステルたちがこれから会おうとしている軍人は、ハーケン門に駐留する兵士たちをまとめている将軍――モルガンである。
　遊撃士嫌いと評判の、調査地区への立ち入り禁止を決めた人物だ。
　だからこそ、遊撃士の身分は伏せておく。
　あくまでここにはボース市長のお使いで来た、との立場を押し通す。

「仕方ない。通行を許可しよう……」
　見張りの兵士が折れた。
　メイベル市長の名はかなり有効のようだ。
　エステルたちはアイゼンロードへと足を踏み入れ、そのまま北へ向かう。
　半刻ほど歩いて、巨大な鉄の門の前まで辿りついた。
「こ、これがハーケン門……」
　呆気にとられるほどの大きさだった。首が痛くなるほど見上げなければならないとは。
　横幅も大きい。手を繋いで三十人は並べそうだ。
　門の傍らには大きな建物が建っていて、そこに兵士たちが駐留しているようだ。ようするにここは国境警備兵の詰所なわけだ。
「エレボニア帝国への唯一の玄関口にして、その脅威からリベールを守る防壁……それがこのハーケン門よ」
　シェラザードがエステルたちに解説してくれる。
「そっか。この向こう側は、もうリベールじゃないんだ……」
「そうだね……さてと。門の脇のあの兵舎。たぶん、将軍はあそこだ」
　ヨシュアが傍らの建物を指さして言った。
「行きましょう」

シェラザードが言って、エステルも気合を入れる。すこし緊張してきた。遊撃士嫌いと聞いていては、それも仕方ないだろう。
兵舎の前に立っていた衛兵がエステルたちに気付いた。
声を掛けられる前に近づいて、市長からの依頼書とともに、モルガン将軍への面会を申しこむ。直接の交渉をしたのはヨシュアだ。
傍らで見守るエステルは思わずぎゅっと手を握ってしまい——。
「おらんよ」
と、さらっと言われて、膝が砕けそうになった。
「い、いない⁉」
「不在だ。捜索活動の陣頭指揮をとっているからな。夜までには戻ると思うが……」
「そ、そんなあ……」
「あっちの休憩所に酒場があるから、待つならそこで待っててくれ。閣下が戻ってきたら教えてあげるよ」
あっち、と言いながら、兵舎のさらに傍らに立っている小屋を指さした。
十年前まで戦争をしていた国との門だ。入る者、出る者、いずれへの審査も国内の行き来に比べて厳しめになる。長く留め置かれる者もいるとかで、そのために宿も酒場も用意されているということだった。

入った酒場は、カウンターと数個のテーブルが置いてあるだけの小さなものだった。
エステルたち三人はカウンターに並んで座り、各々で飲み物を注文する。
任務の途中だから、お酒は頼まない。ただ、ようやっとボースまで辿りついたと思ったら、その日のうちに街道を戻ってここまでやってきたから歩き通しである。喉は乾いていた。
「あー、美味しい！」
「よく冷えてるね」
「仕事がなきゃ、思う存分に呑めるのにねえ」
と、最後の不穏な台詞はシェラザードである。エステルは思わず苦笑を浮かべてしまう。
将軍との面会がすこし先へと延びて、エステルはちょっとほっとしていた。
だから油断したのだ。
カウンターの隣で料理に舌鼓を打っている男がいた。
「フ……。これは驚いた。リベール料理を食べるのは初めてだが、なかなかどうして、いけるじゃないか。帝国料理のような繊細さには欠けるが、素朴で力強い味わいがある」
カウンターの向こうの給仕と親しげな会話を交わしている。
話の内容が漏れ聞こえてきて、エステルはそっと男の顔を見た。
金髪の青年だ。横顔がまるで役者のように整っている。エステルは、子どもの頃のヨシュアの顔もまるできれいな女の人のようだと思ったものだが、この男も負けていない。

貴族のように品があって、グラスを掴む指先まで優雅だった。
白く長い外套を羽織り、胸元を派手な真っ赤なリボンタイで飾っているのが、ちょっとだけやりすぎな気もしないでもない。
「ヨシュア……この人って」
「うん。帝国から来た旅行者みたいだね」
聞こえないよう小声で話した。
ハーケン門を越えてやってきた帝国の旅行者。エステルは帝国の人間を間近で見るのは初めてだったから、つい、何度も盗み見てしまった。
悟られないようにしていたつもりだったが、青年は不意に身体の向きを変えて、エステルを見つめてきた。
「やあ、ごきげんよう！　リベールの人と見たが、帝国に旅行かい？」
笑顔を貼りつけた顔で言われた。
「え？　あ、ううん。あたしたちはここにはヤボ用なの。帝国に行くわけじゃないわ」
うろたえつつもなんとか無難な答えを返せた。エステルはそう思っていた。
「ほう」
だから、金髪青年の次の言葉で、エステルは驚きでもうすこしで椅子からひっくり返るところだったのだ。

「フム。ヤボ用か。なるほど……では君たちは、遊撃士、というやつなのだね」
「ど、どうして……」
胸元の紋章は確かに外していたのに。
度を失ったエステルを見て、青年はにやりと笑みを浮かべる。
彼は、自らをオリビエ・レンハイムと名乗った。

† † †

遊撃士の気配がした——と、オリビエはあくまで気配でわかったと言い張った。
その答えに納得できなかったのはヨシュアだ。
疑わしげな視線を向ける。
「本当にただの旅行者ですか？」
いつものようにヨシュアは冷徹な視線を注ぐ。
だが、オリビエはヨシュアのほうを見つめ返すと、さらりとこう返した。
「フフ、そんな目で見つめないでくれたまえ。冷たく煌めく琥珀の瞳……まるで極上のブランデーのようだね。君の瞳に乾杯しよう。ああ、思わず抱き締めて、キスしたくなってしまうよ」
「なッ……!?」

ヨシュアが反射的に身を引いて距離を取った。頬がひきつっていた。そんなヨシュアをエステルは初めて見たのだ。
シェラザードが目を丸くしている。
エステルは二人の間に割り込んだ。
「ちょ、ちょっとぉ！　あんたそーいう趣味のヒト⁉」
エステルの剣幕に、オリビエが急に顔を曇らせ、寂しげに瞳を陰らせた。
「理解されないというのは悲しいものだな」
切なそうな顔をされて、エステルはひるむ。
「あ、いや、決してそーいう嗜好をダメだと言ってるんじゃないのよ。人の好みはそれぞれだし」
「そう……愛は自由であるべきだ……」
「そ、そうね。そうかも。でもあのね——」
「フッ……ボクは美しいモノに目がないだけだというのに。美の前には性別の差など些細なことだよ。それどころか、人である必要もない。ボクは男も女も、名工の手になる彫刻も、自然の織りなす造形だって、美は等しく愛しているよ」
「そ、そーゆーのは単なる節操ナシって言うのよ！」
「呆れた快楽主義者ね」
「自由な人ですね……」

エステルたちの三様の感想を受けて、オリビエが肩をすくめた。
「いつの時代も天才は理解されないものさ……ねえ、琥珀の瞳の君」
ぎくり、とヨシュアが身をすくめる。
「夜を映した黒い髪がとても素敵だ。どうか、君の胸で泣かせてくれたまえ。理解されずに傷ついた、ボクの壊れたガラスのハートを癒すためにね」
「謹んでお断りします」
ヨシュアが断固として言った。
「なんだって！　信じられない。ああ、ボクはいま、絶望という荒野をさすらう当てのない旅人のようだよ。この悲しみを受け止めてくれる安らぎという名の港は何処かにないものか……。長い髪のお嬢さん、君はどうかな？　君のゆたかなむ……やわらかな腕でボクを受け——ぐえ」
最後まで言わせずに、エステルはオリビエの頭を思わずはたいていた。
「安らげない胸で悪かったわね！」
「フフ……だいじょうぶ。ふつうというのは、それなりに美しいものだ。お嬢さん、そんなに気にすることは——げふっ」
「まだ言うか！」
「エステル……気持ちはわかるし、叩かれて当然だとは思うけど、いちおう彼はこれでも帝国からリベールに観光にやってきたお客様だよ。もう少し丁重に扱ってあげないと」

「大丈夫よ。これでも手加減したもん」
　きっぱりと言った。
　それでも憤懣（ふんまん）やるかたないという気持ちだった。
「まあ確かに僕のときはお盆（トレイ）の角だったけどね」
「あ、あれは……その。そうよ、今回は素手だもん！」
「威張るようなことじゃないと思うけど……」
　ヨシュアがため息をついた。
　扉が開く音がして、エステルたちに声がかかる。
「おーい、あんたたち」
　声に振り返れば、戸口にいたのは兵舎の前で見張りをしていた衛兵だ。将軍が戻ったぞと告げてくる。
「え、ホント？」
「すぐに、とのことだ。至急、兵舎まで来てくれ」
　そう言われて、エステルはなんとか気持ちを切り替える。
「ようやく情報が手に入るわね」
　シェラザードが言った。
　エステルたちは酒場の代金を払って、休憩所を出た。

「フッ……それでは行ってみるとしようか」
　ぴたりとエステルたちの後ろにオリビエが付いてきていた。
「……こら！　なに自然に付いてこようとしてんのよっ？」
「面白そうだから見物させてもらおうと思ってね。ああ、ボクのことは気にしなくていいよ。そこらにある路傍の石だと思ってくれたまえ」
「思えるか！」
　ぐいぐいと扉の向こうへと押し戻す。
「ほら、戻りなさいよ！」
「……ケチ」
　泣きそうな顔までしてみせて、オリビエは休憩所へと帰っていった。
「とんでもない人だな……何者なんだろう？」
「タダ者じゃないのは確かね。いろんな意味で」
　ヨシュアも、シェラザードさえも疲れた顔になっている。
「帝国人ってみんな、ああなのかしら」
「そ、それは違うと思うけど……」
　ヨシュアが額に汗を浮かべながら言った。
「まあ、気を取り直して行きましょう。ここからは慎重に振る舞わないとね。今度は遊撃士だ

ってばれないように」
シェラザードが念を押す。
「はい！」
エステルとヨシュアは元気よく返事を返したが――その返事があっさり覆されることになろうとは。
このときのエステルは思ってもいなかった。

† † †

『執務室』と書かれた、兵舎の奥まった部屋に将軍はいた。
扉を叩くと、誰何（すいか）の声とともに入室を促される。
エステルは深呼吸をひとつ。
思い切って扉を開ける。
出迎えたのは、軍服をかっちり着こんだ壮年の男性だった。髪も髭も白く、かなりの歳のようだが、眼光は鋭くて老いを感じさせない。
「よく来たな。わしの名はモルガンという。女王陛下から、このハーケン門を任されておる者だ」
気負いもなくさらりとそう言った。

「初めまして」
こちらの口を切ったのはシェラザード。
「ご多忙なところを失礼します」
ヨシュアが言葉を添える。この二人に任せておけば安心だ。
「なに、メイベル嬢のことはよく知っておる。まして、市長としての依頼とあれば受けぬわけにはいかんだろう」
「えっと。じゃあ、これを……」
エステルは、メイベル市長からの依頼状を手渡した。
「む……やはり、この件か……」
「行方不明の飛行船にはボースの商人も乗っていると聞いております」
「市長は、飛行船の運航停止が経済に打撃を与えることも心配しているようですね」
「そうか……。とはいえ、軍の情報をいたずらに民間人にばらすわけにもいかんのだ。まあ、話せる範囲で状況を説明しよう。どうせ、いずれは公式発表としていくらか情報は出さねばならん……リベール通信あたりが煩いだろうからな」
そう前置きしてから、モルガン将軍は《リンデ号》――定期船の名前だ――の失踪について語った。
それによれば――。

飛行船は定刻通りに空港を離陸し、航路の途中で音信を絶ったという。
つまり空を飛んでいる間に行方知れずになったわけだ。
「ということは、魔獣の仕業ではない？」
「そうなるな」
飛行船を叩き落とせるような魔獣は今のところ知られていない。離着陸の前後の、まだ地上を離れるかどうかの時に襲われることはあっても。
「事故の可能性は？」
ヨシュアがそう問いかけたとき、エステルの心臓がぎゅっと一瞬だけ縮こまった。
それがいちばん怖かったのだ。
だが、即座にモルガンは否定した。
「その可能性も低かった」
「と、いうと？」
「あれだけの大きな飛行船が墜落すれば、これだけの捜索で破片のひとつも見つからんのは解せんのだ。実際、ボースとロレントの間の空路は、比較的見晴らしのいい平原の上にある」
エステルは頭のなかで素早く地図を広げた。
王国の北側にあるロレントとボースの間には、確かに森と平野しかない。南へと下れば《ヴァレリア湖》と呼ばれる大きな湖があるものの航路からは外れすぎる。

「いちおう湖にも捜索は広げてある。だが、今のところ何も見つかってはおらん」
モルガンが言った。
エステルは思わず安堵の息を吐いてしまう。
「となると……飛行船が自ら航路を変えて失踪したのかもしれないわね……」
「ええっ⁉　シェラ姉、それどういうこと？」
「積荷目当ての強奪とか、乗客を人質にした身代金要求とか……そういうことよ」
「いわゆるハイジャックですね。もしくは……考えたくないけど、このボースという地理的条件を考えると、帝国軍による工作、という可能性も……」
「は、話が大きくなってきたわね」
まさか、帝国の陰謀説まで飛び出すとは思わなかった。
「ん？　どうしたの、将軍さん？」
「……いや、民間人にしてなかなか良い目の付け所だと思ってな」
「あっ」
思わず声が出た。ぎくりと身をすくませる。
一瞬、正体がばれたかとエステルたちは身構えてしまった。だが、将軍は腕組みをしたまま唸り声をあげたのだ。
「むう。そこまで考えが及ぶとは。やはりメイベルの使いともなると、それなりの者を寄越す

ようだな」
「お、恐れいります」
シェラザードが辛うじて言葉を返した。
「帝国の関与は我々も真っ先に疑ったのだ。だからこそ、情報は規制せざるを得なかった。だが……今頃は、市長の元にも情報が渡ってしまっているだろうから言ってしまうが……先ほど、その可能性も消えた」
エステルたちは、いっせいに伏せていた顔を上げて将軍を見た。
「消えた？」
「うむ。ある組織が、王家と飛行船公社に犯行声明を送りつけた上で、乗客の身代金を要求してきたのだ」
エステルは息を呑む。
（身代金……ってことは、ヨシュアの言ったように、ハイジャック！）
なるほど、とエステルは納得した。ボース市は飛行船貿易にも熱心な商業都市だ。飛行船公社を通じてメイベルには連絡が行くはずだった。
「そ、それで、その組織って……？」
「《カプア一家》だ」
「え！」

エステルは今度こそ本当に驚いたのだ。まさかその名前をここで聞くとは……。
「それって、空賊の……」
「そうだ。三兄妹に率いられた、ボース地方で暗躍する空賊団だな。ほう、どうやら、名前くらいは聞いたことがあるようだな？」
将軍に感心したという率直な口調で言われて、思わずエステルの口が滑った。
「聞いたことがあるどころか、ロレントでやり合ったばかりよ！　あいつら、まさかこんな大きな事件を起こすなんて――」
「エステル！」
ヨシュアの声にエステルは我に返った。
（しまった！）



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.110

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



1 3名様

『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd Evolution』クリアファイル

『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd Evolution』のパッケージイラストで使用されたキービジュアルのA4判クリアファイルを3名にプレゼント!!



2 1名様

『イース』革製コースター

超豪華な革製のコースター「赤」と「茶」の２色1組を１名にプレゼント！

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.110プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：『創の軌跡』第3の主人公チームの印象は？
4：『創の軌跡』のクロスストーリーシステムで期待していること
5：希望するプレゼント番号
6：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：創の軌跡最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC
　～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　4月27日（月）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。